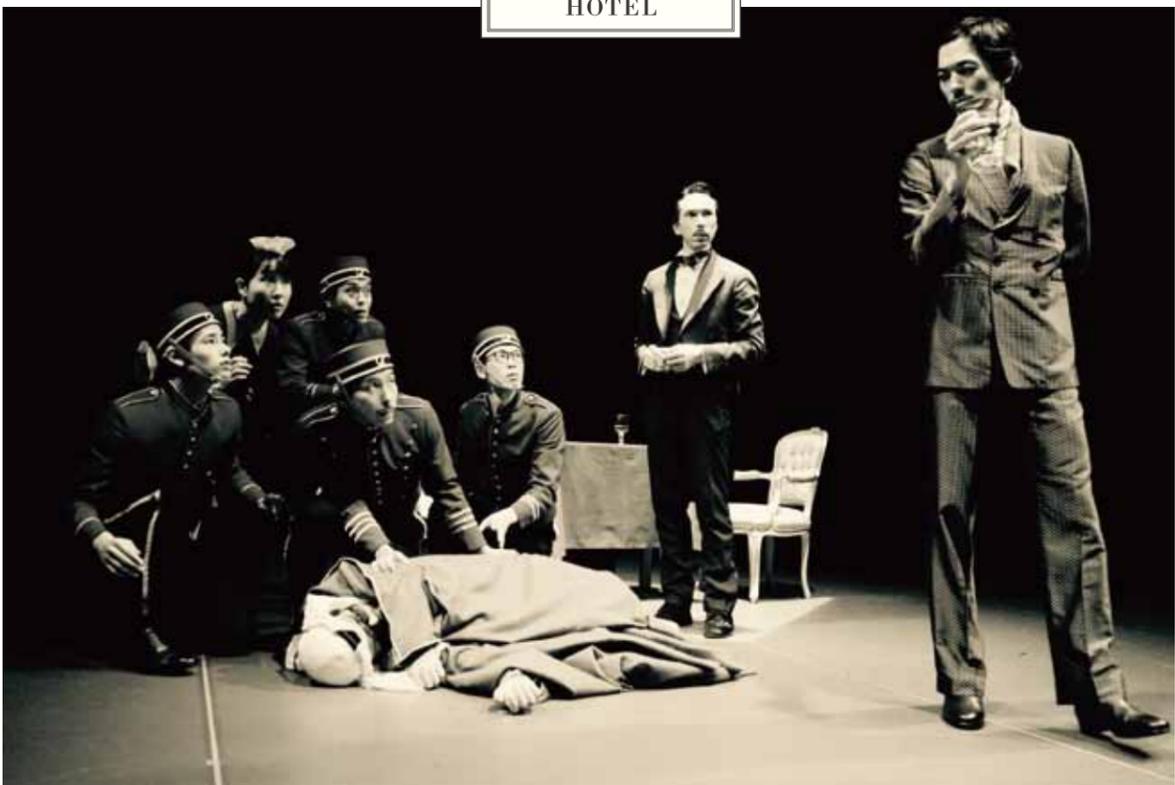




首藤康之×CAVA  
LENINGRAD HOTEL  
レニングラード・ホテル



interview

## 演者と観客が作る 劇場の空気 そのシンプルな美しさ

バレエダンサー

# 首藤康之

インタビュー

## YASUYUKI SHUTO

——本作は、ロシア・レニングラードに佇むホテルを舞台にした無言劇です。作品が生まれたきっかけを教えてください。

「19歳のとき、初めて訪れたロシアのイメージが入り口となっています。ソ連が崩壊する前のこと。街の雰囲気は暗かったのですが、泊まったホテルがびっくりするほど大きく、各階に支配人がいて、天井も高くて、部屋も広くて。道も建物も何もかも、その大きさに圧倒されました。」

僕は、ポリシヨイ劇場で古典バレエ全幕の主役デビューだったんですが、楽屋の外に一人ずつお付きの女性が座っていて、世話をしてくれました。昔からずっと働いて、劇場を愛しているおばさんたち。このときの本番、僕は失敗をしてしまったんです。楽屋でわんわん泣いていたら、あるおばさんが慰めてくれました。『あの有名なマイヤ・プリセツカヤが『白鳥の湖』にデビューしたとき、私がついていただけで、あなたと同じ転び方をしたの。だから大丈夫よ』って。

その時に感じた、人間の小さな温かみと、ロシアの大きくて冷たいイメージとのギャップが心に残っていたので、いつか東側の物語をやりたいと思っていました。ホテルで無表情に挨拶してきた支配人にも、ホテルの内側では、温かい気持ちのやりとりがあったのではないかと。

——僕たちが、偶然シヨスタコーヴィチのジャズ組曲を耳にしたとき、当時のロシアの情景が浮かんできて……。今が面白いタイミングかもしれないな、と。「ホテルの話にする」「ホテル側の人間を演じる」「シヨスタコーヴィチの曲を使う」というアイデアを、マイムカーンパーニャ・CAVAの丸山和彰さんに伝え、この物語を考えていただきました」

でも、何度も演じるうちに、曲がレニングラード・ホテルに歩み寄ってくれて、調和を感じるようになったんです。この曲を聴くと、レニングラード・ホテルを思い出す。そんな曲になったらいいですね」

——言葉がないので、色んな方が楽しめる作品ですね。

——言葉がないので、色んな方が楽しめる作品ですね。

——CAVAとの共演はいかがでしたか？  
「僕にとって『言葉がない』のは居心地がいいんです。海外で、言葉が分からなくても、それを越えて通じ合えた経験があるので、言葉が通じないときのジェスチャーにも似たマイムという表現は、この作品に合っていると思いました。」

CAVAの魅力は、メンバー5人の個性が一人ひとり違うところ。人間のあらゆる性格が、5人の中に集約されています。本作は、ホテルマンたちの直線的でピシッとした動きが、東側の雰囲気にもマッチしているのですが、その中でも温かみを感じさせるのは、CAVAのキャラクターですね」

——2017年、2018年と公演を重ねる中で、変化はありましたか？  
「シヨスタコーヴィチのワルツをテーマ曲にしてますが、偉大な曲なので、最初は曲が独り歩きしているように感じました。」

——「一人が笑い出すと全員がこの空間で笑っていいんだ」と自由になれるので、笑いたいときは笑って、悲しいときは泣いてもええららと思えます。お客さんの反応は、空気でも伝わります。それによって僕らのパフォーマンスも変わるんです。実は、僕が初めて『コミュニケーション』を



## 知らない者どうしが 通じ合える」と 初めて感じた場所。 それが 劇場でした。

——「一人が笑い出すと全員がこの空間で笑っていいんだ」と自由になれるので、笑いたいときは笑って、悲しいときは泣いてもええららと思えます。お客さんの反応は、空気でも伝わります。それによって僕らのパフォーマンスも変わるんです。実は、僕が初めて『コミュニケーション』を

——僕が初めて『コミュニケーション』を

——最後に、首藤さんが思う「レニングラード・ホテル」の魅力教えてください。  
「シンプルに言って美しい舞台です。衣装や色彩はもちろん、そこに現れる人間の関係性も。人間が2人以上集まると、色んなことが起こります。人間はすごく繊細で、団結力も強いけれど、その繋がりはちょっとしたことパンとはじける不安定さも持っている。だからこそ素晴らしい。人間がコミュニケーションをした時の美しさ。それが本作には組み込まれているんじゃないかと思えます」



首藤康之×CAVA  
レニングラード・ホテル  
5/26@ 15:00~  
@春日井市東部市民センター

詳細情報は、裏表紙で Ticket Guide